

『脳死・臓器移植の本当の話』

小松美彦

PHP 新書 / 2004 年
定価 998 円 (本体 950 円 + 税 5%)

ケアなフル一冊

死とは……?

坂田三允 (群馬県立精神医療センター看護部長)

私は、臓器移植を否定しているわけではないが、積極的に肯定しているわけでもないというあいまいなところに自分をおいている。是非を判断するための詳細な情報ももっておらず、よくわからないというのが正直なところだ。

ただ、自分の臓器を提供するつもりはまったくないし、いただきたいとも思っていない。自分の死後、自分に所属したものをこの世に残したくない(たとえ一部でも残しておくそれが気になって成仏できないような気がする)のと、自分を他人様のものをいただいてまで生きるほど価値ある人間と思っていないからだ。しかし、このたび「臓器移植法」の改正が行なわれることになって、改めてちょっと気になり本書を手にした。

著者は、略歴によれば科学史・科学論、生命倫理学を専門とし、現在の死生をめぐる問題を主に歴史的な視点から検討しているという。本書では主として「脳死者は本当に死んでいるといえるのか」という問題をめぐって、基礎的なことから最新情報までを含めて検討される。

序章では、問題を考察するにあたっての基本的な姿勢、すなわち「自分の目で見る」「自分の心で感じる」「自分の頭で考える」ことの大切さが語られ、2章以降では臓器移植の現実の姿が次々に述べられていく。

さて、脳死は本当に人の死といえるのだろうか。

『臓器移植法』によれば、脳死状態の定義とは“脳幹を含む全脳の機能の不可逆的な停止”である。つまり、大脳、小脳、脳幹のすべてが機

能を停止したため、意識も感覚もなく遠からず確実に死ぬことが保証された状態をいう」

しかし、イギリスの麻酔科医の論文や談話によれば「臓器摘出の執刀時に、ドナーの大半が急速で激しい血圧上昇と頻脈を示す。(中略)そのまま何もしなければ、患者は動き出し、のたうち回りはじめます。(中略)移植医は私たち麻酔医に決まってこう言います。ドナー患者に麻酔をかけてくれ、と」。そしてその麻酔科医は言う、「現状ではとてもドナーカードを持つ気にはなれない」と(第3章)。

終章で語られるのは、旅行先のハワイで事故に会い、脳内出血を伴う脳挫傷で全臓器提供を勧められた女性が、日本に戻り事務職員として週5日の勤務が可能になるまで回復した物語と、1983年、4歳のときに脳膜炎を発症して、脳死と診断され9日以内に死ぬだろうといわれたスティープの物語である。

「だが、医師の言葉に反して少年は九日経っても生きつづけた。(中略)九九年の時点で、体重は脳死当初の一五 kg から六〇 kg へ、身長も一五〇 cm に成長している」

スティープの脳はドロドロに溶けた状態であるというが、母の看病を受けて生きつづけていることは紛れもない事実なのである。

「脳は有機的統合性の唯一の中樞器官ではないことになる」

だとすれば、脳死とは一体何なのだろう？

『人間の尊厳』とは、いかなる状態であれ『あなた』と呼べる者がただそこに『いる』ことに思えてならない」という著者の言葉は私に重く響いた。

さかた・みよし 2か月に一度この連載を書くのに、四苦八苦しています。ピーンとくる本に出会うまで、結構時間がかかって……。でも、一度手にした本は、最後まで読みます。